

「研修会等名称」リメディアル教育セミナー

場所：東北福祉大学 国見キャンパス（仙台市）

期間：平成17年11月5, 6日

1. 研修の内容

今回はリメディアル教育学会が中心になった研修であった。同学会長、小野博教授の基調講演に続いて、この方面で先行している数大学の事例が報告された。また併せて、e-learningの取り組みの事例について報告があり、その技術的な側面についても案内がなされた。

小野教授の基調講演では、大学生を入学直後から大学の環境に馴染ませるためのリメディアル教育を行うことの意義について多面的な見当がなされた。大きな趨勢としては、1980年代はじめから導入が始まった「ゆとりある教育」が結果的には、初等・中等教育の質の低下をもたらしたこと、また90年代になって大学、特に私立大学で多様な入試制度が導入されたこと、さらに92年度のピークの後18歳人口の減少によって事実上応募者全員入学となっている大学が増加したことによって、学力の低下が放置できない事態となっているとの認識である。小野教授はこの問題を特に英語の学力を中心に検討する必要性を説き、英語能力からみたプレイスメント・テストを実施し、それによってクラス編成を行うことが、機械的な振り分けや、能力の差異を考慮せずに入学者の希望によってクラス分けを行な場合よりも、教育効果につながるとの見解を示した。また現実に、2000年10月に大学英語教育学会が実施した実態調査では、入学時にプレイスメント・テストを実施してクラス編成を行っている四年制大学は4割を超えており、導入予定大学を併せると、その割合は既に半数を超えている。さらに2割の大学で学力不足の学生に対する補修授業が既に実施されているとのことである。以上のような状況認識に立って、小野教授は、リメディアル教育のための英語教材として、e-Learning教材「University Voices」を提示した。これは、「大学生のための英語リメディアル教育 e-Learning教材開発プロジェクト」によって作成されたもので、まったくの入門教材ではなく、既に中学校と高等学校を通して英語を履修しながら、基礎的な言語能力が身につかなかった学生への再教育教材であることを目的としている。またその要点は、文字言語の能力は音声言語を基底にもつのでなければならぬこと、扱われる英語の水準は中学校3年間と高等学校1年目の程度を目安にしていること、またその教材はネットワークを利用するパソコンを介して行うものであること、そして学習者が1日1時間週5回、あるいは1日2時間週3回で、2、3か月程度の集中学習によって、大学での英語学習に対応できるようになること、の4点を骨子としている。なおこの教材の実際は、共同開発者である酒井志延・メディア教育開発センター教授によって案内された。

なお2日目には、諸大学でのリメディアル教育の取り組みが紹介されたが、特に関心を惹いたのは、馬場真智子・東京農工大学教授の報告で、そこではリメディアル教育における動機付けの重要性とそのためのさまざまな工夫の実例が提示された。また一日目には、閉会后、東北福祉大学内の食堂で懇親会があり、25名が参加したが、報告とは一味違った感想の交換がおこなわれた。また、そこでは、中部地区の他大学の参加者とも話し合う機会をもつことにもなった。

2. 研修の成果

一日目の報告の中心は、プレイスメント・テストと英語の e-Learning 教材についてであったが、前者はともかく、後者の場合、実際に教材を活用するとすると、学生の「やる気」が前提になり、その点では、動機付けが重要ではないかとの感想を多くの参加者がもったようである。そうした戸惑いも含めた本音を聞くことができたのは、懇親会の席においてであった。またそれは、研修の二日目の中心テーマにも接続した。この点で、特に説得的であったのは、東京農工大学の馬場真智子教授の報告であった。その要点は、最初から英語や国語といった科目にとらわれずに、何であれ、学生に考えさせ、自分で解決を見つけるような場を教室で設定するというものであった。一例として、言語を媒体とした種類では、ある語句を、他者に分かるように説明させるものである。たとえば「人参(にんじん)」を、「馬」や「赤い」と言う言葉を使わないという条件のもとで短い説明文を作成させ、その説明を読んだ人が「人参」と答えれば合格とするという一種のゲームである。これは、事物や物体では比較的容易であるが、「明日」という語、を「夜明け」や「太陽」を使わずに説明文を作成すると、結構難しい。このほか、図形を用いる種類のものも紹介された。要するに、学生が自分で考えることを楽しみながら見につけさせるのが肝心で、それに成功すれば、どの科目でも意欲をもたせる可能性が開けるとことが実例で解説された。 - これは、自発的な思考や工夫を目覚めさせるという勉学意欲の前提をあついていた点で印象に残った報告であった。

研修を通じて痛感したもう一つのことがらは、メディア教材の弱点である。メディア教材の強みのひとつは、画像をふんだんに取り入れることができる点である。しかし、画像はまた、テレビと同じく、往々にして学習者を受動的にしてしまいかねない。次々に画像と文字が映しだされると、説得性は強まるが、その場限りになりかねず、また学習者の自主性を引き出すのには却ってマイナスの場合もある。その兼ね合わせが、メディア教材の課題になることを改めて感じるようになった。

3. 授業への研修成果の反映状況

プレイスメント・テストを介した学習者のクラス編成については、事例報告からは成果を期待できることが知られるものの、本学で実現するには制度上の問題もあり、なお検討を要しよう。しかしもうひとつの柱である e-Learning 教材については、本学に合った、あるいは科目や学年に即したその種のシステムについて組織的な検討を行なう必要があるように思われた。私自身については、講義科目にパワーポイントを活用することを始めているが、プラス面とマイナス面を考慮する必要があると感じている。もっとも、本学の場合は、今回の研修で報告された諸大学に比べて学生の水準はやや上ではないかとの感想ももった。しかし、動機付けを必要とする学生が一部に見られることも現実である。

またリメディアル教育セミナーを一度、本学で開催し、多くの教職員が事例報告を共有するのは、決して無駄ではないであろう。

学部長	FD委員長	FD委員会	総合企画課長	係